

かもや堂、はじめました！



《発行》
藤里町おこします
「かもや堂」
電話 0185-74-5668
〒018-3201
藤里町藤琴字藤琴 55



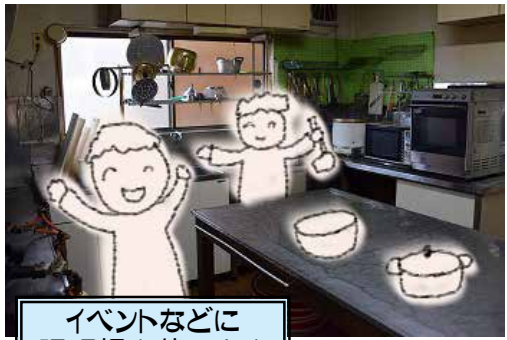
役場前のわかりやすい場所です



として、地域おこし協力隊が拠点としながら、町のみなさんに使っていただくことを考えています。どのように活用していくかもこれからのアイデア次第です。藤里町の笑顔がちよつとずつでも増えるように、気軽に立ち寄って、自由に活用していただければと思います。



町おこし空間「かもや堂」が5月14日にオープンしました。この場所は、元「かもや食堂」さんの場所をお借りして、藤里町の情報の集まる場、おもしろいことを企画する場



イベントなどに調理場も使えます



話し合いの場にも使えます



コピー機もご利用ください



パンフレット等も置きました



お茶を飲んでひとやすみ...



2階の座敷も使えます

※活用イメージです。

自然アドバイザー 菅沼の



晴れたら山いくべ

一年中ブナの森にどっぷりつかりたくて藤里町に来ました。2月から白神山地世界遺産センターで勤務している菅沼です。天気の良い日は、このコミュニティ紙のタイトル同様にとじこじ（本当はぜーぜー）山を歩いています。よろしくお願ひします。

つじめし

藤里ごはん紹介

4月25日、一の渡にある北野天満宮のお祭りでは春の山菜料理がふるまわれました。



ごごみの天ぷら

洗って水分を取り小麦粉や片栗粉を付けて揚げる
♪採りたて&揚げたてがおいしいそうですね！



のかんぞうとさしとりの芽の酢の物

のかんぞう、さしとりの芽、カニかま、ネギ、刻みしょうがなどの具材を、酢、砂糖、味噌、みりん、醤油などで味付ける

調理前ののかんぞうと、さしとりの芽

♪のかんぞう、初めて食べました。くせのないシャキシャキ食感です。

☆集めました☆ 最近のうれしかったこと

- バツケの天ぷら食べました。私の春一番を感じました！（U）
- 大雪の割に意外と早く雪が消えた（K）
- 布川英利子さんは本家の孫さんなのでとてもうれしいです！（I）
- 川原から野の花を掘って家に植えた（Y）
- 集落に赤ちゃんが生まれ、元気な泣き声を聞きました。思わず立ち止まってしまいました（Y）
- 孫が中学と高校に入学し、家族写真を撮り食事会をした事（S）
- ウグイスの鳴き声を聞いた（T）
- 孫の大学。うれしいです（F）
- 市日でりんごを買った（K）
- ダックス・ムーンのコンサートが良かった（O）
- 春が来た事、藤原さんに会えた事（Y）
- 藤里は山、人がいい（B）
- 孫のバスケットが楽しみ（K）
- カタクリの花が咲いた（N）
- いろんな種類の野菜を植えて孫に食べてもらうのが楽しみ（Y）
- 福島にいる息子が新しく家を建てたこと。孫からいろんな話を聞けるのが楽しくて一日が短い（R）
- 山野草や山菜が芽を出してきたこと（N）

石橋談義

この四月から、町では「地域おこし協力隊」として町外から二人の若い女性を招き、町の活性化に取り組むことになった。その一人、名古屋出身の藤原菜奈さんは「情報発信担当」として本紙「とじこじ」の編集にあたる◆藤原さんは大学を卒業したあと情報紙関係の仕事を手がけたこともあるが、藤里町とは全く無縁。地形や集落、そこに住む人たちの特殊性や住民感情などは未知の状態。それをどう捉え、どんな形で情報発信して行くのかいささか心配もあるが、同時にその白紙状態にどんな将来像を描くのか期待することが大きい◆この町には、かつて郷土新聞として情報提供をしてきた週刊発行の「藤里新聞」があった。創刊が昭和三十四年であるから半世紀以上続き、創刊者からバトンを受けた後継者が病死したことで廃刊となった。その新聞の発刊中、それなりの苦情申告もあったようだが、住民たちはいまその新聞に感謝し、再刊を望む声が多い◆それに代わるコミュニティ紙という訳ではないが、いま住民たちは町内の情報に飢え、それを求めていることも確か。インターネット時代とはいえ、この山あいの小さな町も「隣の人ぞ」へと変わってきている。筆者もその歯止めの一住民として本コラムに提言していきたい。（F）

聞き書き 第1回

お客さんさ向かってる姿って素敵だよ 大町・菊地信雄さん



菊地信雄さん（昭和二十七年藤琴生まれ）藤里中学校卒業後、敬愛美容専門学校で学び、秋田の中央病院理髪部で修業。船上、東京で勤務の後、祖父、父から三代続く菊地理容室を経営。

て、反対側をやるってば、脳みそカパッと陥没してる。「おわつ」も思っても、やらなきゃいけないでしょ、一分一秒だもん。でかして帰ってくれば家族の人は泣いてるしな、何とも言えない。中央病院入ってそういう患者さんやっていたのは、修業時代が一番印象に残ってるな。

活気があった親子四人の床屋

修業が終わった後は海外に一年間行った。十九歳くらいだった。スペイン、カナダ、ドイツ、フランス、アメリカと五カ国。船の乗船者の頭を刈りながら行く先々の国の日本人の床屋を見てきた。戻ってからは東京の店さ行った。三年契約だったんだけど、二年半でうちの爺さんが亡くなったもんで急遽戻ってこなきゃいけない状態になった。

戻ってきてからはまず親父・お袋・俺の三人でやっていた。そんで一年半でかみさんもらって、親子四人でやっていた。俺が帰ってきたころは、藤里町にも八千人くらいの人があった。そのころはお客さん毎日入るし楽しかったべな。朝六時から夕方六時までやって、一人一時間かかるから最大十二人しかできねえ。パンだのかじりながらずーっと切ったこともある。たいへんだよ、立ちっぱなしで、それもまた嬉しい悲鳴だ。お客さんいれば楽しい職業。

夫婦で床屋をする幸せ

かみさんも床屋の学校の同級



夫婦二人の床屋だからこそ忙しい時も頑張れる

のことさう思ってるんでねえが、仕事してるときの状態見ると、ああ一緒に仕事してよかったと思う。

父の背を見て床屋になった娘

娘三人いるけども、一番目と三番目は床屋さなってるのよ。床屋やりたいっちゅうことで専門学校で修行させて、今から5（6年前、二番目の娘に「お父さん私どうすればいい？」って言われた。将来的に自分も私らみたいに夫婦で二人で床屋をやってくつちゅうのが理想であつたらしいんだ。でも、男の床屋さんって少ないのよ。俺らはふたりだから話しながら、暇な時も話しながら、忙しい時も飯食わないで頑張ろうってそういう型をつくってきたから、一人で床屋さんっていう仕事やる状況が私も判断できなかつたし、娘さもうこれ以上の苦労はさせたくねえなと思つて、好きな人いたら結婚してもいいよって言うてしまったのよ、さ。そしてたらもう、羽っこついたらようにすぐ結婚した。

三番目の娘は秋田さ嫁になつて、秋田の床屋に勤めながらやってる。完全に道離れたわけじゃ

町に人に恩返ししたい

俺もだんだん歳行けば、この町さ恩返ししたいなという気持ちある。ただもう少し仕事したいな。それでかみさん元気うち、身体丈夫なうち、もう十年はなんとかできるんでねえかな。俺は基本的に床屋っていう職業好きだし、ありがた職業だな。健康である限り頑張つていって、最後は町に人に恩返しして終わりたいと思う。（聞き手・藤原）



信雄さんの代で駐車場をつかった店舗

昭和二十七年六月二十一日、藤里町の藤琴で生まれました。床屋は私で三代目で、百年はなってるんでねえか。俺で三代床屋で携わっているお客さんいっぱいいるよ。孫爺さん、親父、俺って、三代にやってもらったつてお客さん。

三代続いた床屋の跡取り

秋田駅前まで行ったこともあつた。ただ、帰る電車がなくなつた。田舎さ来る電車もなくなつた。だから辞めなかつた。ちようど覚え始めの二年くらいまでがやつぱりつらいな。三年目なればだんだん慣れてくつからまだあれだけ。昔は「見て覚えれ」でしょ。仕事一年間はさせてもらえねえから、床掃いたりタオル洗ったりそればかり。それで先輩方の仕事をたまたに見て覚える。一年過ぎて初めてお客さんに接したのがシャンプーとかドライヤーとか。刃物使わない部分から入つていく。売り場を広げるからつて四年

中央病院での修業時代

修業時代は、秋田の木内デパートのところで修業してたけども、あのお堀さカミソリ三丁くらい投げて。もう床屋やめるつて。それだけ修業時代はたいへん。要は刃物使うから。同業の人がた、かなり途中で挫折したんでねえかな。俺も帰ろうと思つて

中央病院の中理髪部だから、お客さんは病院の入院患者だよ。交通事故が起きて頭骨折したとかねえ。手術する前に剃つてくれた。手術した人運ばれてるもの、だいたいストレッチャーに乗つけてくるときは陥没してるとこさ下にしてくるべ。なんともないところ、見えてるところだね。そこをまずざつと剃るわけよ。し

とんじこんじ抄
藤里町ってどんな町ですか？そう聞かれたとき、なんと答えますか。「町の主役は自然であり、ここに住む人々です」と作家塩野米松さんは町の聞き書き集に寄せています。身近な人々の積み重ねてきた歴史を知ると、藤里は一層愛おしくなる。シリーズ【聞き書き】は、未来は懐かしい過去にあると思わせてくれるはずです。（シャケ）

編集後記
日々試行錯誤の七転八倒で「とじこじ」をつくっています。いたらないことが多いですが、よろしく願います（ナナ）